柳　宗悦の民芸論（XXVIII）
－職人尽絵（続）－

八　田　善　穂

目　次

（1）『人倫重宝記』
（2）『彩画職人部類』
（3）『職人尽絵詞』
（4）『今様職人尽歌合』
（5）『天工開物』
（6）『景徳鎮陶録』
（7）洛中洛外図屏風（追補）
（8）『信楽焼図解』

本稿は拙稿「柳宗悦の民芸論（XXVI）－職人尽絵－[1)]」の続篇である。

（1）『人倫重宝記』

元禄9年（1696）に大坂の久保田喜兵衛、京の中野彦三郎により刊行された。全5巻から成り、その内容は次の通りである。

巻の1

一　天子の御出所

二　公家の出所

三　将軍の御出所

四　大名の出所

五　農人のはじまりの事　日本国中知行高田地数並ニ農具の始まり

六　細工人並ニ番匠のはじまり

1）徳山大学論叢第67号（2008年12月）所収。

七　商人市立のはじまりの事
八　呉服所といふ名の事
九　冠師烏帽子折のはじめ
十　扇屋のはじまり並に笏
十一　鏡屋のはじまり　十二の手箱　鏡台　紅手拭　鏡とぎのはじまり
十二　櫛屋のはじまり
十三　白粉屋のはじまり

巻の二
一　組屋のはじまり
二　縫物屋のはじまり
三　紺屋のはじまり
四　布屋帛屋機屋のはじまり
五　筆屋並ニ墨硯紙の始り並ニ文字の始
六　鍛冶屋のはじまり　刀かぢ　道具かぢ
七　弓屋矢師のはじまり
八　具足屋のはじまり
九　茶碗天目焼物屋のはじまり
十　銭屋のはじまり

巻の三
一　能のはじまり
二　医者のうハさ
三　鍼立の評判
四　茶の湯者のはじまり
五　鞠のはじまり
六　楊弓雀小弓の沙汰
七　盤上のはじまり

八　相撲の濫觴

九　三味線のうハさ

巻の四

一　歌舞妓芝居のはじまり

二　人形操からくり並ニ浄留理の始

三　遊女のはじまり

四　酒屋のはじまり

五　魚屋のはじまり

六　鰻頭屋のはじまり

七　饂餅屋のはじまり

八　饂麺類屋のはじめ

九　傘屋のはじまり

十　木履屋のはじまり

十一　韈履草履鞋雪駄のはじまり

十二　塗師のはじまり

十三　琵琶法師のはじまり

十四　仏師の濫觴

巻の五

一　鉢扣のはじまり

二　鉢坊主鉢尼の沙汰

三　願人のうハさ

四　薦僧のはじまり並尺八

五　鳩の飼のはなし

六　占や算のはじまり

七　御符祈禱人の事

八　灸おろしの沙汰

九　按摩とりの沙汰

十　人倫安楽天下泰平[2)]

全体は文章（由来）が主であるが、20個所に図版が添えられている。それらは次の通りである。

巻の一の一　天子の御出所の事
　　五　農人のはじまり
　　七　商人の市立のはじまり
　　十　扇屋のはじまり

巻の二の一　組屋のはじまり
　　二　縫物屋のはじまり
　　四　布屋帛屋機屋のはじまり
　　六　鍛冶屋のはじまり
　　八　具足屋のはじまり
　　九　茶碗天目焼物屋のはじまり

巻の三の一　能のはじまり
　　二　医者のはじまり
　　三　鍼立のはじまり
　　五　鞠のはじまり
　　六　楊弓雀小弓の沙汰

巻の四の一　歌舞妓芝居のはじまり
　　二　人形操からくり並浄留理の始
　　五　魚屋のはじまり

2）石山洋、五十嵐金三郎『江戸科学古典叢書39　職人尽絵詞、人倫重宝記』恒和出版、昭和57年刊、読解、PP3－5。

十　木履屋のはじまり

十一　韈履草履履鞋雪駄屋のはじまり

巻の五の一　鉢扣のはじまり

四　薦僧のはじまり

六　占や算のはじまり

八　灸おろしの沙汰

全56項目のうち、「ものづくり」としては次の諸項が該当する。

巻の一　細工人並に番匠　冠師烏帽子折　扇屋　鏡屋　櫛屋

巻の二　組屋　縫物屋　紺屋　布屋帛屋機屋　筆屋　鍛冶屋　弓屋矢師　具足屋　茶碗天目焼物屋

巻の四　傘屋　木履屋　韈履草履鞋雪駄　塗師　仏師

一例として、「茶碗天目焼物屋のはじまり」の項を記すと以下の通りである。

「茶碗やきをもろこしにてハ陶冶（すへものつくり）となづく。神農はじめてやき出せりと周書にミへたり。又事物紀原にハ、黄帝のとき甯（ねい）の封人（ほうじん）もろもろのうつわものを□埴（に）してやきいだせりとあり。そのゝち舜（すへ物つくり）も陶し給ふ事古書に見へたり。

日本にてハ神代にはじまり、土師忌部（はじいんべ）の両神やきはじめ給ふといへり。人の世となりてハ、西国におほくやきいだし、伊末里（いまり）・唐津・瀬戸・萩等、ミやこ方にハ、御室・音羽・粟田口焼などの名作あり。嵯峨・深草・畑枝のかハらけ焼までミな陶冶（すへものつくり）のながれなり。

禁裏（きんひ）にハ水火にハけがれなし、うつハ物にハがれ有とて、茶碗・天目・土器（かハらけ）の焼ものをもちひ給ふ事にて、今に嵯峨・深草の両所より年の暮にハゑぼし素袍（すハう）にて参内し、かハらけを献上するの例にて、かれらが家に巻物けいづありと也。

ある人焼物ハわるゝがわびしきといハれければ、その座にゐあわせたる人、鉄椀・鉄皿ハおもきがわびしきとこたへられしに、わるゝがわびしきといひし人かほうちあかめてはづかしげにミへける。

又ある大名の小姓殿のひざうの茶碗をうちおとして破ければ、殿御きげんよろ

しからずミへけるを、御前にさぶらひける人、易に月ミちては虧（かくる）と侍（はんべ）るなれば、丸き物ハかくることわり有にやと憚ながらぞんじ奉るととりなしを申されけれバ、大名御きげんなをりけるとぞ[3)]。」

（2）『彩画職人部類』

橘岷江が描き、明和7年（1770）に刊行された（上・下2冊）。28種の職人が取り上げられており、その内容は次の通りである。

1　衣料・服飾関係

冠師、織殿、糸組、扇折、傘張、針師

2　美容・薬品関係

鏡磨、元結扱

3　居住関係

大工、御簾屋、畳指

4　器物関係

鍛冶、籠作、硝子吹、土器師、轆轤細工、磨切

5　美術・文化用品関係

紙漉、鞠屋、琴師、面打、筆結、経師、賀留多屋、硯彫

6　武具・武器関係

具足師、鍔師、靫師[4)]

3）同書、読解。PP.24－25。

4）石山洋、樋口秀雄『江戸科学古典叢書6　七十一番職人歌合・職人尽絵・彩画職人部類』恒和出版、昭和52年刊、解説、P.44。

このうち、「硝子」について見ると次のように記されている。

「本朝のものならず、外国より出ると云、紅毛人持来れるを始とす、其製いたって美なり

中興、長崎に是を製することを得て、花洛、坂陽に伝へ、其業をなすものあり、近比は、東都に其職行ハれ、品類数多、器物の物数奇徴明也、まことに四海おさまれる君が代の徳化溢れ、かゝる外国に産するものまでも能くなく鳩集すハ、有がたき聖代ならずや[5)]」

（3）『職人尽絵詞』

鍬形蕙斎（北尾政美、本名赤羽紹真、1764－1824）により、文化3年（1806）頃までに3巻の絵巻物として描かれた。東京国立博物館と国立国会図書館に所蔵されており、前者は松平定信旧蔵の原本、後者は明治44年書写の模本である。

詞書は3巻それぞれ筆者を異にし、上巻は四方赤良（大田南畝（直次郎）、1749－1823）、中巻は手柄岡持（朋誠堂喜三二（本名平沢常富）1725－1813）、下巻は山東京伝（北尾政演（本名岩瀬醒）、1761－1816）である。

全体で95種の職人が描かれており、その内容は次の通りである。

1　衣料・服飾関係

呉服屋、縫取師、仕立師、竹馬の布売、袋物屋、合羽屋、蚊帳売、紺屋、洗張、砧打

2　美容・薬品関係

松井源水（歯磨粉）、花火師、枇杷葉湯、床屋、居合（匂い歯磨き、反香丹）

3　食品関係

魚市、搗師、米屋、夜蕎麦売、油売、焼鍋、豆腐屋、蒲鉾屋、居酒屋、蒲焼屋、四文屋、鰯屋、天麩羅屋、白飴売、心太売、飴売、醴売、卵売、賃餅

5）同書、原文読解、P. 8。

4　居住関係

大工、屋根葺、畳職、左官、地衝、宮師、木挽

5　器物関係

鍛冶屋、車造、輪掛屋、籠屋、鋳物師、金具師、鋳掛屋、錠前直し、鋸目立

6　美術・文化用品関係

仏師、表具師、板木屋、木彫師、人形師、印判師、琴師、煙管師、煙草入、大道商人（骨董商）

7　武具・武器関係

鍔師

8　その他の日用品関係

炭団屋、附木屋、傘提燈屋、煙草屋、煙管売、蠟燭職人

9　サービス業関係

寺子屋、馬子、車屋、銭湯、読売、町医者、歳之市

10　芸能・娯楽関係

町芸者、夜鷹、操芝居、豆蔵、楊弓、角力、触太鼓、検校、戯場、書画会、猿回し、太神楽、角兵衛獅子、万才、浄瑠璃師匠、節季候、吉原、茶屋

11　宗教関係

神楽、法師、大山参り[6)]

詞書の一例として、次のようなものがある（中巻）。

「鋳物師ハ鍛冶の妻にして　かな物屋の母也　かな具師一名錺屋ハ　かな物

6）『江戸科学古典叢書39　職人尽絵詞・人倫重宝記』 解説　PP.65－66。

屋の弟にして　煙管張の兄なりといへども　弟のいきほひにはおよびがたし
きせる張は　枝葉江都にはびこりて　中にも住吉村田世に高し[7)]」

（4）『今様職人尽歌合』

「職人尽絵詞」と同じ鍬形蕙斎の職人絵を挿絵とし、文政4年（1821）に刊行された（2冊）。描かれた職人（71種）は次の通りである。

1　衣料・服飾関係

古傘買、草履造、団扇売、笠ぬい、仕立物師、呉馱歯入、真田売、さし物師

2　美容・薬品関係

櫛挽、膏薬売、簪売

3　食品関係

飴売、水売、魚売、夜蕎麦売、卵売、海苔漉

4　居住関係

井戸掘、桶竹売、壁塗、樋造

5　器物関係

古椀買、陶物師、針金売、からくり師、鋳物師、鍋いかけ、籠目結、臼目立、鍋のつる売、ろくろ引、さし物師、硝子吹、つゞら張

6　美術・文化用品関係

笛売、面打、磬目造、硯切、きせる師、紙漉、経師、人形師、三弦師、眼鏡売、看板書、紙屑買、張こ造、太鼓売、鼈甲師

7　武具・武器関係

銃炮師

8　その他の日用品関係

ひめ糊売

9　非都市的生産関係

網打

10　愛玩動物関係

7）同書、P.71。

植木売、花うり、放鳥売、虫売、金魚売

11　サービス業関係

事ぶれ、奉公人口入、博労、車引、読売、按摩取

12　芸能・娯楽関係

万才、鳥追、獅子舞、猿曳、軽わざ、こま廻し、居合抜

13　宗教関係

神道者[8)]

（5）『天工開物』

中国の明末、崇禎10年（1637）に江西省奉新県の学者宗應星により書かれた産業技術書である。内容は中国在来の技術を次の18部門に分けて記載している。

1穀類　2衣服　3染色　4調整　5製塩　6製糖　7製陶　8鋳造　9舟車　10鍛造　11焙焼　12製油　13製紙　14製錬　15兵器　16朱墨　17醸造　18珠玉[9)]

また絵図は次のように配されている。

1　穀類　耕　耙（まぐわ）　耔（つちかさ）　耘（くさとり）　筒車　牛で動かす龍骨車　人力で踏む龍骨車　抜車（手まわしの龍骨車）　はねつるべ　北方では耕作が播種を兼ねる　北方で種子をおおう　南方で大・小麦の種子をまく　耨（除草）

2　衣服　山（まぶし）と箔　糸くり　経糸をくる　緯糸をくる　整経　花機、模様を織り出す織機　経糸を糊づけする　腰機　棉くり　棉打ち　こすって紐にする　糸をつむぐ

8）同書、解説、PP.68 − 69。
9）宗應星『天工開物』 平凡社東洋文庫、目次、PP.10 − 11。

4　調整　湿田に稲をうつ　稲の脱穀場　稲や豆をローラーにかける　風（扇）車（とうみ）　木製のすりうす　土製のすりうす　からうすと手杵　水碓、屋根は茅でふく　水力による磨　牛力を使う碾　小麦粉を篩いわける　小碾　からさお

5　製塩　灰をまいて塩をつくる　粗塩を浸出し、煮つめて塩を精製する　四川省の井塩　池塩

6　製糖　サトウキビをしぼって糖汁をとる　獣糖

7　製陶　瓦をつくる　瓦の素地を桶からはずす　土で磚の素地をつくる　水によって転泐する　石炭で磚を焼く　ポットをつくる　登りがま　缸（かめ）をつくる　ろくろで磁器をつくる　磁器を水ですすぐ　釉をかける　絵付け　磁器を焼く窯

8　鋳造　鼎や鐘を鋳込む　鐘の型をつくる　釜を鋳込む　目方千斤の鐘や仙・仏の像を鋳込む　銭を鋳込む　銭に鑪がけをする　日本で銀貨をつくる

9　舟車　糧船　六丁櫓の課船　八頭立の大車　二頭立の独轅車　南方で使う一人用の推車

10　鍛造　錨を鍛接する　針つくり　鉦と鐲を鍛造する

11　焙焼　煤炭餅で石を焼いて石灰とする　かきをほりとる　南方で石炭を掘る　皂礬を焼く　焼いて硫黄をとる　砒石を焼く

12　製油　南方の搾油装置　種子を搗いたりひいたりする　種子を炒る

13　製紙　竹を切り溜池につける　竹を十分に煮る　竹麻を簾ですく　簾をひっくり返し、紙を積み重ねる　火を通して紙をあぶり乾かす

14　製錬　銀鉱石を採掘する　鉱石をとかし銀と鉛を製錬する　鉛を沈めて銀をとり出す　分金炉で銹底を製錬する　銅をとかす　銅と鉛を採掘する　亜鉛を精錬する　土をたがやして錠鉄を拾う　砂鉄を洗いとる　銑鉄・錬鉄の製錬炉　山錫　南丹州の水錫　錫の製錬炉

15　兵器　矢の調整と弓力の試験　弩を張る　百子連珠法・神烟砲　吐燄神毬と神威大砲　流星砲、九矢鑽心砲　地雷　混江龍　鳥銃（火縄銃）　万人敵

16　朱墨　朱をする　水銀の製錬　水銀から朱をつくる　油を燃やして清煙を掃きとる　松煙をつくる

17　醸造　川で米をさらす　涼風を受けて変化する

18　珠玉　潜水して真珠をとるための船　帆走して真珠をとる　宝井　宝気にあたる　白玉河　緑玉河　玉をみがく

記述の一例として、7製陶のうち、甕の部分を挙げると次の通りである。

「製陶家がつくる甕の種類は何百何千もある。大きなものは缸や甕で、中くらいのものでは鉢や盃、小さなものは、瓶や罐である。その形状はそれぞれ地方によってちがっていて、数えきれない。ただこれからは必ず円くて角ばっていない焼物である。土を調べ陶土を選んでから、さらにろくろをつくるが、仕事に熟練した者は、器の大小に応じて泥をつまみとり、その分量に大した狂いはない。二人が土をもちろくろをまわし、ひとひねりしてできあがる。朝廷で

使用する竜鳳缸〔窯は真定の曲陽と、揚州の儀真とにある〕と南直隷（江蘇地方）の花缸とは厚く土をくっつけ、それを彫りこんでゆくので、全くつくり方がちがっている。だからその値段は百倍とか五十倍とかになる。

甕に耳や口のあるものは、みな別にそれをつくってからくっつけ、釉（うわぐすり）をとかした水で塗り固める。陶器にはみな底があるが、底のないものとしては陝西から以西で使う蒸し器があって、そこでは素焼きのを用い、木製のものを使わない。

いろいろな焼き物の中で、精巧なものは内外ともに釉をかけ、粗末なものは半分だけに釉をかける。ただ沙盆、歯鉢の類は、その内側に釉をかけないで、ざらざらした所を残し、すりつぶすのに都合よくする。沙鍋や沙鑵は釉をかけない。すると物を煮つめるのに火の通りがよい。

釉の材料はどこででもできる。江蘇、浙江、福建、広東で用いるのは、蕨藍草という種類で、その草は住民の燃料となる。長さは三尺までである。枝や葉は杉の木に似ているが、束ねても棘がたたない〔それをよぶ名称は数十もあり、土地によってちがう〕。製陶家はこれをとってきて、燃やした灰を袋に入れ、水を注いで漉し、粗いものを去ってごく細かいものをとる。この灰二椀ごとに紅土泥水一椀をまぜ、よくかきまわして素地の上に塗る。これを焼くと自然に光沢が出る。北方で何を用いているかは、はっきりしない。蘇州の黄罐に使う釉も別に原料がある。　ただ朝廷で用いる竜鳳器は、やはり松脂と無名異とを用いる。

瓶窯では小さい焼物を焼き、缸窯では大きなものを焼く。山西省や浙江省では缸窯と瓶窯を区別しているが、他の省では一つの窯を兼用している。

口の開いた甕をつくるには、ろくろをまわして上下半分ずつをつくり、それを接合したつぎ目は、木槌で内と外から叩き固める。 口のせまった壜や甕も上下半分ずつを接合するが、槌が使いにくいので、あらかじめ別の窯で金剛圈の形をした丸瓦を焼き、内側におしあて、外から木槌で叩くと土が自然にくっつく。

缸窯や瓶窯などは、平地につくらないで、必ず台地の斜面につくり、長いものには二、三十丈、短いものでも十余丈の長さに数十窯を連ねるが、みな一窯ごと

に一段ずつ高くなっている。つまり勾配を利用して川水に浸される恐れをなくするとともに、火気が一段ごとに上に上ることになるからである。 数十窯で焼物をつくるばあいに、値段の高いものは大して得られないが、多くの労力と資力をかけてつくっている。 窯が円くつくりあがると、その上をごく細かい土で厚さ三寸ばかりにおおう。 窯には五尺ほどへだてて煙を通す穴があり、窯の口は向かいあって開いている。装入するにはごく小さい焼物を最下段の窯に入れ、非常に大きな缸や甕は最後の高い窯に装入する。火はまず最下段の窯から焚き始め、二人が向かいあってかわるがわる火加減をみる。おおよそ焼物百三十斤について薪百斤を消費する。 火が十分まわった時にその焚口をしめ、それから次に第二の焚口で火を燃やし、順次火をつけて最後の窯に至るのである。[10)]」

（6）『景徳鎮陶録』

藍浦が遺した原著に門弟の鄭廷桂が補輯して嘉慶20年（1815）に刊行された。しかしその後版木が焼失し、同治9年（1870）に重刻されたがこれも広くは普及せず、光緒17年（1891） 3版が刊行された。全10巻のうち第1巻が図説となっており、そこには景徳鎮の図、御窯廠の図の他、陶成の図として次の14図が載っている。

取土（陶石の採掘）、練泥（土練り）、鍍匣（さや造り）、修模（型なおし）、染料（コバルト青料の精製）、做坯（木挽き）、印坯（型押し）、鏃坯（削り仕上げ）、画坯坏（下絵付け）、蕩釉（くすり掛け）、満窯（窯詰め）、開窯（窯出し）、彩器（上絵付け）、焼炉（錦窯＝上絵付）[11)]

10） 同書、PP.138－140。

11）藍浦『景徳鎮陶録1』 平凡社東洋文庫、PP.68－99。なお、全巻の構成は以下の通りである。巻一　図説、巻二　国朝御窯廠恭記　鎮器原起、巻三　陶務条目、巻四　陶務方略、巻五　景徳鎮歴代窯考、巻六　鎮仿古窯考、巻七　古窯考　各郡県窯考　外訳窯考、巻八　陶説雑編上、巻九　陶説雑編下、巻十　陶説余論

12）青幻舎、大江戸カルチャーブックス、2007年刊。

（7）洛中洛外図屏風（追補）

狩野博幸『新発見・洛中洛外図屏風』[12] には、元和6年（1620）に行われた徳川2代将軍秀忠の息女・和子（まさこ）の、後水尾天皇の女御となるための入内の様子を描いた屏風が詳しく紹介されている。

この中に描かれた諸職・生業は次の通りである。

組紐師、研師、髪結い、染物屋、刀研ぎ、柴売り、瓜売り、繍師、傘張り、玩具屋、提物屋、真綿屋、小袖屋、足袋屋、呉服大店、両替商、扇屋、煙草屋、紙屋、帯屋、棹竹売り、説経語り、琵琶法師、数珠・土産物屋、人形店、物乞い、巡礼、鐘勧進、掛茶屋[13]

また、奥平俊六『洛中洛外図　舟木本』[14] には、戦後発見され現在東京国立博物館に所蔵されている「舟木本」（17世紀初頭頃）が紹介されている。この中でも「ものを作る人々」として、建具師、桶結、枡師、塗師、錫師、研師、柄巻き師などが挙げられている[15]。

（8）『信楽焼図解』

信楽焼（滋賀県）に関して、明治5年、ときの県庁の指示により、地元（甲賀郡信楽郷神山（こうやま）村および長野村）から状況報告がなされた。その中に描かれた図の一部が、保育社カラーブックス388『日本の陶磁8　信楽伊賀』[16] に掲載されている。内容は以下の通りである。

神山村

仕上げの図、素焼きの図、絵かきの図、
釉がけの図、窯詰めの図、窯焼きの図[17]

長野村

土掘り及び土運び用具の図、土取り場の図、土砕き及び土篩い道具の図、

13）『新発見・洛中洛外図屏風』　PP.82 － 97。
14）小学館、アートセレクション、2001年刊。
15）『洛中洛外図　舟木本』　P.111。
16）平野敏三著、昭和52年刊。
17）『日本の陶磁8　信楽伊賀』PP.92 － 96。

土干小屋の図、土ごしらえの図、壷つくり道具の図、壷つくりの図、土漉しの図、薬漉し、薬掛けの図、窯詰めの図、窯焼の図、腰白耳付茶壷、真黒茶壷、石爆（はぜ）茶壺、味噌壷と水壷、荷造りの図、出荷の図[18)]

18）同書、PP.144 − 151。